⑤ 乱用後の職業(表 3－8)

乱用頻度が減少するにつれて、その占める比率が減少する傾向のある＜乱用後の職業＞は、覚せい剤乱用に絡みやすく、比較的早期に事例化しやすい職業と考えられ、〔07. その他の自営業〕、〔09. 会社員〕、〔13. 風俗営業関係者〕、〔20. その他の被雇用者〕などにこの傾向が見られる。

逆に＜乱用の頻度＞が減少するにつれて、その占める比率が増加する傾向のある＜乱用後の職業＞は、乱用が長期化しやすく、症状が慢性化・遷延化した者が流入しやすい職業と考えられるが、それは〔31. 無職〕と〔32. 暴力団組員〕である。

⑧ 現在の配偶関係(表 3－9)

＜乱用の頻度＞が減少するにつれて、[有配偶]の占める比率が有意に減少する傾向があり、[離別]の占める比率が増加する傾向がある。覚せい剤乱用の長期化、精神病症状の慢性化・遷延化に伴って、配偶関係が成り立ちにくいことが如実に表わされている結果と思われる。

⑨ 学歴(表 3－10)

＜乱用の頻度＞が減少するにつれて、[高校卒業]、[高卒後各種学校(在学・中退・卒業)]、[大学生(在学・中退・卒業)]の占める比率は減少する傾向がある。これは単に最近の覚せい剤乱用の一般化によって高学歴の乱用者が増加していることを反映しているほかに、社会生活能力が一応備わっているために覚せい剤乱用による関連問題に比較的的確に対応して、精神科受診に結びつき易い傾向も表わしていると思われる。

一方、＜乱用の頻度＞が減少するにつれて、[中学校卒業]の占める比率は増加する傾向がある。これは乱用開始年齢が若く、身体的な脆弱性のため、あるいは社会生活能力が低いためなどにより、覚せい剤の乱用が長期化しやすく、精神病症状が慢性化・遷延化しやすいことの表れと考えられる。

⑩ 乱用開始からの期間(表3－11)

＜乱用の頻度＞が減少するにつれて、＜乱用開始からの期間＞のうち、その占める比率が減少する傾向があるのは、[1 年以内]、[1 年超過 3 年以内]、「3年超過 5 年以内」である。また[5 年超過 10 年以内]では有意な増減の傾向は認められない。[10 年超過]の占める比率は、＜乱用の頻度＞が減少するにつれて、有意に増加する傾向がある。

さて、[最近 1ヵ月間に使用なく、最近 1 年間に 1 回以上使用]および[最近 1 年間に使用なく、過去に 1 回以上使用]、すなわち[最近 1ヵ月間に使用なく、過去に 1 回以上使用]の群は、**＜後遺症の事例＞**と見なすことができることは既に説明した。対象事例 3, 418 例のうち、**＜後遺症の事例＞**は全体で 938 例 27. 4%を占めており、＜乱用開始からの期間＞の区分、すなわち[1 年以内]、[1 年超過～3 年以内]、[3 年超過～5 年以内]、[5 年超過～10 年以内]、[10 年超過]、[不詳・不明]の順にその占める比率を見ると、52 例(5. 5%)、132 例(14. 1%)、121 例(12. 9%)、195 例(20. 8%)、409 例(43. 6%)、29 例(3. 1%)となっており、乱用期間が長期化するにつれて、占める比率は増加傾向を示しており、[5 年超過～]の事例が合わせて 604 例(64. 4%)となっている。

4. 幻覚・妄想等の＜異常体験＞に関する全体的考察

(表 2－3)において、＜初診時の症状＞として幻覚・妄想等の [異常体験]を有する者の

占める比率は、<乱用開始からの期間>が[1年以内]の事例では 315 例中 74.6%と中位の値を示すが、[1 年超過～3 年以内]の事例では 589 例中 69. 3%と有意に低い値を示す。さらに[3年超過～5 年以内]の事例では 502 例中 74. 1%、[5 年超過～10 年以内]の事例では 619 例中 73. 8%と中位の値を示し、[10 年超過]の事例では 1, 160 例中 77. 1%と有意に高い値を示す。このことから覚せい剤乱用が 3 年を超えて長期化すると、覚せい剤乱用による幻覚・妄想等の[異常体験]が逆耐性現象によって徐々に慢性化・遷延化すること、あるいは症状が再燃・増悪しやすくなることが見られ、10 年を超過するとこれらのため精神科受診につながる事例が有意に多くなることを表わしていると思われる。

更に(表 2－3)によって、これらの事例の精神科受診時には、不安・興奮・焦燥感等の[感情面の異常]を示す事例も多い傾向がある。

(表 2－12)において、<乱用開始からの期間>と<乱用の頻度>との関係をみると、<乱用開始からの期間>が長くなるにつれて、[最近 1 ヶ月に 20 回以上使用]、[最近 1 ヶ月に 1 回以上 20 回未満使用]の占める比率は有意に減少する傾向があるが、[最近 1 年間に使用なく、過去に 1 回以上使用]の占める比率は有意に増加する傾向がある。このことは覚せい剤乱用が長期化した事例においては、過去の覚せい剤乱用により発現した幻覚・妄想等の精神病症状の慢性化・遷延化、あるいは症状の再燃しやすさが備わって、覚せい剤を乱用すること自体がその症状増悪の原因となるため、覚せい剤の<乱用の頻度>が減少する傾向があることを表していると思われる。

次に(表 3－3)において、今回対象とした覚せい剤乱用事例 3, 418 例のうち、<初診時に異常体験を有する後遺症の事例>は 661 例 19. 3%であり、過去の覚せい剤乱用によって幻覚・妄想などの[異常体験]を発現し、最近 1 ヵ月間に 1 回も覚せい剤の使用がなくても、精神病症状の慢性化・遷延化により、あるいは症状の再燃・増悪によって精神科を受診するに至った事例である。これらの<初診時に異常体験を有する後遺症の事例>のなかには、覚せい剤精神病の遷延・持続型(文献 6、7、8)、あるいはアルコールなどの併用により症状の再燃・増悪した事例、さらには心因など種々のストレスによるフラッシュ・バックの事例が含まれると見なされるのである。

また(表 3-11)において、<乱用の頻度>が [最近 1 ヵ月間に使用なく、過去に 1 回以上使用]の<後遺症の事例>は全体で 938 例に上るが、このうち、<初診時に異常体験を有する後遺症の事例>は 661 例 70. 5%を占めることになる。

以上のことを考え合わせると、①対象とした覚せい剤乱用事例においては、乱用が長期化するにつれて、逆耐性現象により精神病症状の再燃のしやすさが備わってきて、覚せい剤を乱用すること自体がその症状の再燃・増悪の原因となるため、覚せい剤の<乱用の頻度>が減少する傾向が認められること、また②過去の覚せい剤使用によって発現した幻覚・妄想等の精神病症状は、乱用の長期化に伴い慢性化・遷延化、あるいは再燃・増悪によって、最近 1 ヵ月間に覚せい剤使用がないにもかかわらず精神科を受診する事例が多くなること、さらには③今回対象とした覚せい剤乱用事例全体のうち、19.3%が<初診時に異常体験を有する後遺症の事例>であり、この中には覚せい剤精神病の遷延・持続型(文献 6、7、8)、あるいはアルコールなどの併用により

症状の再燃・増悪した事例や、心因など種々のストレスによるフラッシュ・バックの事例が含まれると見なされることを表わしている。

これらのことは覚せい剤乱用の長期化に伴って慢性脳障害がもたらされ、覚せい剤精神病の遷延持続する症例のあることを第一次覚せい剤乱用期から立津ら(文献 9)が主張して以来、わが国の精神医学界が育んできた「覚せい剤精神病」に関する共通の疾病概念を支持する重要な所見と思われる。

臨床単位としての覚せい剤精神病のとらえ方には、日本と欧米の間には相違があり、これは立津らの「覚醒剤中毒(1956)」(文献 9)とConnell の「Amphetamine Psychosis(1958)」(文献 10)の二つの著書に端を発している(文献 11、12)。立津らは覚せい剤精神病の症状が長期持続する症例の存在を指摘して、覚せい剤の慢性脳障害(慢性中毒モデル)を早くから想定していたのに対して、Connell は覚せい剤精神病をあくまで覚せい剤の直接的薬理作用による急性症状(急性中毒モデル)として捉えた(文献 12)。そして覚せい剤が尿中から検出されなくなっても精神病症状が持続する症例は覚せい剤精神病の診断から除外し、ヒステリー性の遷延などの理由がないときは統合失調症が誘発されたとみるべきとしている(文献 10、13)。

現在でも特に米国においては、急性中毒モデルに依拠して、DSM-Ⅳ のように急性覚せい剤中毒の臨床類型の一つとする見方が基本にあり(文献 11)、尿中に覚せい剤が証明されない場合は、覚せい剤依存と覚せい剤により誘発された統合失調症という二重診断を主張しているのである。覚せい剤が統合失調症の症状を誘発・増悪させる可能性は常に考慮する必要はあるが、覚せい剤精神病を単純に覚せい剤依存症と統合失調症の合併とするのには問題がある。

一方、わが国では最近は、覚せい剤による慢性脳障害が、覚せい剤の急性薬理作用によって精神病エピソードを発症させ、覚せい剤が排出された後もエピソードが遷延したり、再使用や非特異的因子で再発を繰り返す原因と考えられている(文献 11、14)。

5. 覚せい剤乱用防止教育の必要性を示唆する結果についての考察

今回の調査の結果得られた覚せい剤の使用による「精神医学的な慢性影響」並びに「社会生活上の慢性影響」は、すべて実証的なものであり、青少年に対する教育現場や地域社会における覚せい剤乱用防止教育にとって良い資料となることが期待される。

ここでは、覚せい剤乱用防止教育上、特に重要であると思われる結果について以下に列記する。

1)＜覚せい剤の入手経路＞を年齢階級別にみると、＜10 歳代＞の年齢層では[友人]の占める比率が 42. 1%と特に高いのが注目される。

2)第 3 次覚せい剤乱用期における乱用初期の使用方法として特徴的にみられる、覚せい剤の「アブリ吸入型の使用」を表わす[吸入]の占める比率は、＜10 歳代＞24. 2%、＜20 歳代＞15. 2%と他の年齢階級に比べて有意に高い傾向があり、現在の第 3 次覚せい剤乱用期を支えている若年層の特徴が表われている。

3)＜10 歳代＞の年齢層では、[娯楽段階]の者が 27. 4%おり、他の年齢階級と比べると特に高い比率を占めている。しかし覚せい剤乱

用事例全体を乱用期間別にみると、5年を超えて乱用する事例が50%以上を占めており、ひとたび覚せい剤乱用に手を染めると、非常に長期化することが見込まれる。

4) [小・中学生]は覚せい剤の<乱用の頻度>が少なくなるにつれて、有意に増加する傾向のある<乱用前の職業>として挙げられる。このことは覚せい剤の使用開始年齢が若く、その身体的脆弱性から、あるいは社会生活能力が低いために、乱用が長期化しやすく、また覚せい剤による幻覚・妄想等の精神病症状が慢性化・遷延化しやすいものと推察される。

5)対照とした覚せい剤事例3, 418例の学歴別の調査結果から、①[中学校卒業]が27%台を占めており、高等学校等への進学率が非常に低い値であること、②覚せい剤乱用事例では[高校中退]の占める比率は30%を超えており、著しく高い値であること、③<就学年数>が[13年以上] の高学歴者は全体の11. 6%を占めており、うち<短大・大学>に進学した者の比率は6. 4%と低い値であること、などから判断して、覚せい剤乱用事例では学業が著しく成り立ちにくいことが分かる。

D. 結論

以上の結果をまとめると、以下のように要約できる。

1. 対象とした覚せい剤乱用事例について

今回調査対象とした覚せい剤乱用事例は、平成3(1991)年度から平成14(2002)年度までの12年間に依存性薬物情報研究班に報告された全9, 969件の依存性薬物情報報告事例うち、34. 3%を占める覚せい剤乱用事例3, 418件である。このうち、[男性]2, 649例77. 5%、[女性]764例22. 4%であり、<年齢階級別>の分布をみると、<10歳代>95例2. 8%、<20歳代>1, 241例36. 3%、<30歳代>1, 277例37. 4%、<40歳代>489例14. 3%、<50歳以上>286例8. 4%となっており、<20歳代>と<30歳代>にピークのある分布を示す。

2. 覚せい剤乱用の背景や要因となる項目について

1)<40歳代以下>では[有機溶剤]が覚せい剤乱用への「踏み石(step stone)」になっており、<30歳代以下>では[有機溶剤と大麻の二剤以上]の乱用もまた覚せい剤乱用への「踏み石」になっている。

2)覚せい剤乱用に絡みやすい<乱用前の職業>としてその占める比率が5%以上の比率を占める職業を順に挙げると、第1位[無職]15. 1%、第2位[土木建築業関係者]9. 8% 、第3位[その他の被雇用者]9. 4%、第4位[工員]8. 0%、第5位[風俗営業関係者]6. 7%、第6位[暴力団組員]6. 1%、第7位[交通運輸業関係者]6. 0%、第8位[会社員]5. 5%、第9位[高校生]5. 0%となっており、これらの職業で全体の71. 6%を占めており、ほかに[34. 不明]が8. 5%を占めている。

3)<覚せい剤の入手経路(重複回答あり)>を男性・女性別にみると、男性では第1位[売人]70. 9%、第2位[友人]23. 3%、第3位[知人]18. 8%であり、女性では第1位[売人]51. 6%、第2位[友人]28. 9%、第3位[恋人(愛人)]26. 8%となっており、男性では[売人]の比率が比較的高く、女性では[恋人(愛人)]の比率が特に高いのが注目される。

3. 覚せい剤乱用に関わる項目について

1)＜乱用開始からの期間＞を覚せい剤乱用事例 3, 418 例全体でみると、[一年以内] 315 例 9. 2%、[1 年超過～3 年以内] 589 例 17. 2%、[3 年超過～5 年以内] 502 例 14. 7%、[5 年超過～10 年以内] 619 例 18. 1%、[10 年超過] 1, 160 例 33. 9%となっており、[不詳・不明]が 233 例 6. 8%いる。乱用期間の[5年超過]が 52. 0%を占めることから、ひとたび覚せい剤乱用に手を染めると、非常に長期化する傾向のあることが判明した。

2)＜乱用の頻度＞を対象事例 3, 418 例全体で見ると、[最近 1ヵ月に 20 回以上] 346 例 10. 1%、[最近 1ヵ月に 1 回以上 20 回未満] 1,564 例 45. 8%、[最近 1ヵ月に使用なく、最近 1 年間に 1 回以上使用] 564 例 16. 5%、[最近 1 年間に使用なく、過去に 1 回以上使用] 374 例 10. 9%となっており、[不詳・不明]が 570 例 16. 7%いる。したがって、対象事例 3, 418 例中、＜現在乱用中の事例＞は 1, 910 例 55. 9%、＜後遺症の事例＞は 938 例 27. 4%であり、年齢層が高くなるにつれて＜後遺症の事例＞の占める比率が増す傾向が認められる。

覚せい剤の＜乱用開始からの期間＞と＜乱用の頻度＞との関係をみると、覚せい剤乱用が長期化するにつれて、幻覚・妄想等の精神病症状の慢性化・遷延化、あるいは症状の再燃しやすさが備わって、覚せい剤を乱用すること自体がその症状の再燃・増悪の原因となるため、覚せい剤の＜使用の頻度＞が減少する傾向があると思われる。

3)乱用の長期化により精神病症状の慢性化・遷延化した 30 歳代以上の事例においては、精神病症状の再燃・増悪の原因として、併用薬物としての[アルコール]が重要な位置を占めていると考えられる。

4. 覚せい剤乱用による精神医学的な慢性影響

1)初診時に＜急性中毒症状＞を示す者の比率は、対象事例 3, 418 例のうち、878 例 25. 7%となっている。＜急性中毒症状＞を呈する者の比率は、＜乱用開始からの期間＞が[1 年以内]の事例で有意に高い比率を示しており、この範囲を超えて乱用が長期化するにつれて、有意に減少する傾向を示している。

2)初診時に＜離脱症状＞を示す者の比率は、対象事例全体では 298 例 8. 7%に認められる。＜離脱症状＞を呈する者の比率は、＜乱用開始からの期間＞が[1 年以内]の事例で有意に高い比率を示しており、この範囲を超えて乱用が長期化するにつれて、有意に減少する傾向を示している。

3)初診時にせん妄、注意力・記憶の減退等の＜意識・注意力の異常＞を有する者の比率は、対象事例全体では 1, 601 例 46. 8%となっている。

4)初診時に幻覚・妄想等の＜異常体験＞を有する者は、対象事例全体では 2, 547 例 74. 5%の高率となっている。今回対象とした覚せい剤乱用事例 3, 418 例のうち、＜初診時に異常体験を有する後遺症の事例＞は 661 例 19. 3%であり、乱用期間が 5 年超過の事例で多くなる傾向が認められる。これらの事例は過去の覚せい剤乱用によって幻覚・妄想などの[異常体験]を発現し、最近 1ヵ月間に 1 回も覚せい剤の使用がなくても、精神病症状の慢性化・遷延化により、あるいは症状の再燃・増悪によって精神科を受診するに至った事例であ

る。これらの＜初診時に異常体験を有する後遺症の事例＞のなかには、覚せい剤精神病の遷延・持続型（文献 6、7、8）、あるいはアルコールの併用により症状の再燃・増悪した事例、さらには心因など種々のストレスによるフラッシュ・バックの事例などが含まれると見なされる。

これらの結果は考察の項でも述べたように、わが国においては第一次覚せい剤乱用期から立津ら（文献 9）が主張し、わが国の精神医学界に共通の認識となっている「慢性中毒モデル」に依拠した「覚せい剤精神病」の疾患概念を支持する重要な所見と思われる。

5）初診時に不安・興奮・焦燥感等の＜感情面の異常＞を呈する者は、対象事例全体では 79. 6%の高率となっている。[感情面の異常]を示す者の比率は、＜乱用開始からの期間＞の[3 年超過～5 年以内]を境として、これより乱用の期間が短いときには勿論、この範囲を超えて乱用が長期化してもやはり、＜感情の異常＞を示す者の比率が有意に増加する傾向がある。

6）初診時に脱力感・全身倦怠感・意欲減退等の＜欲動面の異常＞呈する者は、対象事例全体では 57. 3%となっている。[欲動面での異常]を示す者の比率は＜乱用開始からの期間＞が長期化しても大差のない比率を示している。

7）[小・中学生]は覚せい剤の＜乱用の頻度＞が少なくなるにつれて、有意に増加する傾向のある＜乱用前の職業＞として挙げられる。このことは覚せい剤の使用開始年齢が若く、その身体的脆弱性から、あるいは社会生活能力が低いために、乱用が長期化しやすく、またその幻覚・妄想等の精神病症状が慢性化・遷延化しやすいものと推察される。このことは覚せい剤乱用防止教育の必要性が示唆される重要な所見と思われる。

5. 覚せい剤乱用による社会生活上の慢性影響

1）覚せい剤乱用事例では、①[中学校卒業]が 27%台を占めており、高等学校等への進学率が非常に低い値であること、②覚せい剤乱用事例では[高校中退]の占める比率は 30%を超えており、著しく高い値であること、③＜就学年数＞が[13 年以上] の高学歴者は全体の 11.6%低く、うち＜短大・大学＞に進学した者の比率も 6. 4%と低いこと、などから判断して、覚せい剤乱用事例では学業が著しく成り立ちにくいことが分かる。

2）＜乱用による問題の程度＞は＜乱用開始からの期間＞が長期化するにつれて、その程度が増強している。

3）＜乱用による問題行動の内容＞のうち、＜乱用開始からの期間＞が長期化するにつれて有意に増加する傾向を示すのは、[暴行傷害]、[器物破損]、[脅迫恐喝]であり、粗暴な傾向が増加することが認められる。一方、[引き籠り]は＜乱用開始からの期間＞が長期化するにつれて有意に減少する傾向が認められる。

4）＜乱用開始からの期間＞が長期化するにつれて、＜仕事・学業上の障害の程度＞は確実に増加することが認められる。

5）＜乱用開始からの期間＞が長期化するにつれて、＜家庭生活上の障害度＞もまた確実に増加することが認められる。

6）覚せい剤乱用事例全体のなかで[無職]の占める比率は、覚せい剤乱用前には 15. 1%の値であるが、乱用後には約 3 倍の 46. 3%と

いう高い値になっていることから、覚せい剤乱用の職業生活への影響が如実に示されていると思われる。

7)＜乱用前の職業＞のうち、[会社員]、[風俗営業関係者]、[その他の被雇用者]、[大学生]、[主婦]は、覚せい剤の乱用開始後、比較的早い時期から職業生活面での影響が表われて事例化しやすく、乱用の長期化に伴って問題が生じれば、比較的継続しにくいため離職・流出しやすい傾向がある。

また、乱用前の職業の[小・中学生]においては、覚せい剤の使用開始年齢が若く、その身体的脆弱性から、あるいは社会生活能力が低いために覚せい剤の乱用が長期化しやすい傾向があり、それに伴って幻覚・妄想等の精神病症状の慢性化・遷延化、あるいは症状の再燃・増悪により精神科に受診する事例が増加する傾向があると思われる。

8)＜乱用後の職業＞のうち、[交通運輸業関係者]、[無職]、[暴力団組員]は、乱用の長期化に伴い問題が生じても、比較的継続しやすく、また就労・流入しやすい職業とみなすことができる。

9)＜乱用開始からの期間＞が長くなるにつれて、[未婚]の占める比率が有意に減少する傾向がみられ、[離別]の占める比率が有意に増加する傾向がみられるのは、覚せい剤乱用により配偶関係が非常に成り立ちにくいことを表している。

10)最近の[高校卒業]以上の学歴をもつ覚せい剤乱用者は、社会生活能力を発揮して覚せい剤乱用による関連問題に的確に対処するためもあり、比較的早期に精神科に受診する傾向がみられる。

D. 健康危険情報

覚せい剤はひとたびその乱用を開始すると、長期の乱用に結びつきやすく、覚せい剤乱用が長期化した事例では、最近1ヵ月間に1回も使用しなくても、幻覚・妄想等の異常体験が慢性化・遷延化することにより精神科受診に至る事例が有意に多くなる傾向がある。その際には、不安・興奮・焦燥感等の感情面の異常をもまた示す事例が比較的多い。また、精神科受診する時には、これらの精神医学的慢性影響に加えて、種々の社会的な慢性影響を有する状態である。

特に小・中学生時代の若い年齢のときから乱用を開始すると、その身体的脆弱性から、あるいは社会生活能力が低いために、乱用が長期化しやすく、またその幻覚・妄想等の精神病症状が慢性化・遷延化しやすいものと推察される。

E. 研究発表

1. 論文発表　　なし

2. 学会発表　第39回日本アルコール・薬物医学会総会(2004年9月)にて報告予定。

F. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

特許取得・実用新案登録・その他　　なし

文　献

1. 和田　清、小沼杏坪:薬物依存の疫学.「精神医学レビューNo.24　精神障害の疫学(大塚俊男編集)」、pp69-76、ライフ・サイエンス、東京、1997

2. 厚生労働省医薬食品局監視指導・麻薬対策課:薬物の乱用・依存症の事例に関する調査(依存性薬物情報研究班).「麻薬・覚せい剤行政の概況」、pp173-183, 2003

3. 福井　進:薬物乱用をめぐって－概念・臨床・歴史－. 犯罪と非行、No.134:29-66、2002

4. 小田　晋:社会病理現象としての薬物乱用.「現代精神医学大系第 23 巻A社会精神医学 と精神衛生 I (佐藤壱三・宮本忠雄編集)」、pp181-197、中山書店、東京、1980

5. 和田　清:薬物使用に関する全国住民調査.「平成 13 年度厚生科学研究費補助金(医薬安全総合研究事業)薬物乱用・依存等の実態把握に関する研究及び社会経済的損失に関する研究班(主任研究者:和田　清)研究報告書」、pp15-77、2002

6. 覚せい剤中毒者対策に関する専門家会議(座長:加藤伸勝):昭和 60 年度覚せい剤中毒者総合的対策研究報告書(1986)

7. 小沼杏坪:覚せい剤乱用・依存の臨床. 依存性薬物情報シリーズ No.3「覚せい剤」、pp83-98、依存性薬物情報研究班(班長:加藤伸勝)編集、千葉、1988

8. 小沼杏坪:覚せい剤依存と関連精神障害(治療).「臨床精神医学講座第 8 巻 薬物・アルコール関連障害(佐藤光源・洲脇　寛責任編集)」、pp236-253、中山書店、東京、1999

9. 立津政順、後藤彰夫、藤原　豪:覚醒剤中毒、医学書院、東京、1956

10. Connell,PH:Amphetamine Psychosis.　Oxford University Press、New York、1958

11. 佐藤光源、松本和紀:覚せい剤依存と関連精神障害(症状・経過・診断).「臨床精神医学講座第 8 巻 薬物・アルコール関連障害(佐藤光源・洲脇　寛責任編集)」、pp222-235、中山書店、東京、1999

12. 小沼杏坪、尾崎　茂、和田　清:覚せい剤による精神・行動の障害.「アルコール・薬物関連障害の診断・治療ガイドライン(白倉克之、樋口　進、和田　清編集)」、pp159-185、じほう、東京、2003

13. 佐藤光源、柏原健一:「覚せい剤精神病」、pp13-108、金剛出版、東京、1986

14. 佐藤光源、中島豊爾、大月三郎:覚醒剤中毒の臨床的研究. 精神医学 24(5):481-489、1982

表1-1 入院・外来別、国籍の別

入院・外来別	(人)	(%)
入院	1,415	41.4
外来	2,002	58.6
不明	1	0.0
覚せい剤事例全体	3,418	100.0

国籍別	(人)	(%)
日本籍	3,332	97.5
外国籍	57	1.7
不明	29	0.8
覚せい剤事例全体	3,418	100.0

表1-2 男女別・年齢階級別

男性・女性別	小計		男性		女性		不明	
年齢階級別	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
10歳～ 19歳	95	2.8	30	1.1	65	8.5	-	-
20歳～ 29歳	1,241	36.3	839	31.7	401	52.5	1	20.0
30歳～ 39歳	1,277	37.4	1,037	39.1	238	31.2	2	40.0
40歳～ 49歳	489	14.3	448	16.9	41	5.4	-	-
50歳～	286	8.4	274	10.3	11	1.4	1	20.0
不明	30	0.9	21	0.8	8	1.0	1	20.0
覚せい剤事例全体	3,418	100.0	2,649	100.0	764	100.0	5	100.0

表1-3 過去の乱用薬物(主要な薬物についてのみ表示)

過去の乱用薬物	小計		10歳～19歳		20歳～29歳		30歳～39歳		40歳～49歳		50歳～		不明	
(A)規制薬品	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
13 合成麻薬ー幻覚薬・興奮薬	6	0.2	1	1.1	4	0.3	1	0.1	-	-	-	-	-	-
14 覚せい剤	1	0.0	-	-	1	0.1	-	-	-	-	-	-	-	-
15 大麻	78	2.3	1	1.1	45	3.6	23	1.8	3	0.6	6	2.1	-	-
16 有機溶剤	1,002	29.3	34	35.8	434	35.0	412	32.3	99	20.2	15	5.2	8	26.7
(B)医薬品				-										
26 鎮咳剤、鎮咳去たん剤	8	0.2	-	-	2	0.2	3	0.2	-	-	3	1.0	-	-
(C)二剤以上				-										
40 規制薬品二剤 以上	289	8.5	8	8.4	133	10.7	120	9.4	18	3.7	6	2.1	4	13.3
43 規制薬品一剤を含む二剤以上 の組み合わせ	42	1.2	1	1.1	13	1.0	18	1.4	7	1.4	2	0.7	1	3.3
(D)アルコール				-										
50 アルコール	15	0.4	-	-	1	0.1	3	0.2	3	0.6	8	2.8	-	-
(E)その他の物質				-										
70 不明	26	0.8	-	-	6	0.5	12	0.9	7	1.4	1	0.3	-	-
なし	1,928	56.4	49	51.6	596	48.0	677	53.0	347	71.0	242	84.6	17	56.7
覚せい剤事例全体	3,418	100.0	95	100.0	1,241	100.0	1,277	100.0	489	100.0	286	100.0	30	100.0

表1-4 現在の併用薬物(主な薬物についてのみ表示)

現在の乱用薬物	小計		10歳～19歳		20歳～29歳		30歳～39歳		40歳～49歳		50歳～		不明	
(A)規制薬品	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
15 大麻	36	1.1	2	2.1	24	1.9	8	0.6	2	0.4	–	–	–	–
16 有機溶剤	47	1.4	4	4.2	28	2.3	12	0.9	1	0.2	1	0.3	1	3.3
19 第三種向精神薬	30	0.9	–	–	7	0.6	13	1.0	6	1.2	4	1.4	–	–
(B)医薬品														
20 全身麻酔剤、催眠鎮静剤など	39	1.1	–	–	15	1.2	17	1.3	4	0.8	3	1.0	–	–
21 解熱鎮静消炎剤	7	0.2	–	–	5	0.4	1	0.1	1	0.2	–	–	–	–
26 鎮咳剤、鎮咳去たん剤	8	0.2	–	–	3	0.2	4	0.3	1	0.2	–	–	–	–
(C)二剤以上														
40 規制薬品二剤以上	8	0.2	–	–	3	0.2	4	0.3	1	0.2	–	–	–	–
43 規制薬品一剤を含む二剤以上 の組み合わせ	26	0.8	2	2.1	12	1.0	8	0.6	3	0.6	1	0.3	–	–
44 規制薬品を含まない他の二剤以上 の組み合わせ	18	0.5	1	1.1	2	0.2	9	0.7	4	0.8	2	0.7	–	–
(D)アルコール														
50 アルコール	284	8.3	3	3.2	58	4.7	105	8.2	60	12.3	55	19.2	3	10.0
(E)その他の物質														
70 不明	17	0.5	–	–	3	0.2	8	0.6	5	1.0	1	0.3	–	–
なし	2,872	84.0	83	87.4	1,071	86.3	1,077	84.3	397	81.2	218	76.2	26	86.7
覚せい剤事例全体	3,418	100.0	95	100.0	1,241	100.0	1,277	100.0	489	100.0	286	100.0	30	100.0

表1－5 乱用前の職業（主な職業についてのみ表示）

男性・女性別	小計		男性		女性		不明	
乱用前職業	（人）	（%）	（人）	（%）	（人）	（%）	（人）	（%）
01 農林・水産業	26	0.8	26	1.0	－	－	－	－
02 商人（卸・小売）	11	0.3	8	0.3	3	0.4	－	－
03 不動産業	11	0.3	11	0.4	－	－	－	－
07 その他の自営業	49	1.4	47	1.8	2	0.3	－	－
09 会社員	188	5.5	166	6.3	21	2.7	1	20.0
10 店員	62	1.8	42	1.6	20	2.6	－	－
11 工員	273	8.0	265	10.0	8	1.0	－	－
12 公務員	19	0.6	15	0.6	4	0.5	－	－
13 風俗営業関係者	228	6.7	61	2.3	167	21.9	－	－
14 風俗営業以外の飲食業関係者	114	3.3	86	3.2	27	3.5	1	20.0
17 交通運輸業関係者	206	6.0	202	7.6	4	0.5	－	－
18 土木建築業関係者	336	9.8	333	12.6	3	0.4	－	－
19 日雇労務者	10	0.3	10	0.4	－	－	－	－
20 その他の被雇用者	323	9.4	223	8.4	99	13.0	1	20.0
21 医療薬業関係者	12	0.4	2	0.1	10	1.3	－	－
22 芸能関係者	16	0.5	15	0.6	1	0.1	－	－
25 小・中学生	112	3.3	68	2.6	44	5.8	－	－
26 高校生	170	5.0	100	3.8	70	9.2	－	－
27 大学生	47	1.4	36	1.4	11	1.4	－	－
28 各種学校生徒	25	0.7	17	0.6	8	1.0	－	－
29 主婦	50	1.5	－	－	50	6.5	－	－
31 無職	517	15.1	371	14.0	146	19.1	－	－
32 暴力団組員	209	6.1	208	7.9	1	0.1	－	－
33 不定	43	1.3	39	1.5	4	0.5	－	－
34 不明	291	8.5	242	9.1	47	6.2	2	40.0
覚せい剤事例全体	3,418	100.0	2,649	100.0	764	100.0	5	100.0

表1－6 覚せい剤の入手経路（重複回答あり）

男性・女性別	小計		男性		女性		不明	
入手経路	（人）	（%）	（人）	（%）	（人）	（%）	（人）	（%）
友人	840	24.6	618	23.3	221	28.9	1	20.0
売人	2,274	66.5	1,877	70.9	394	51.6	3	60.0
家族	41	1.2	8	0.3	33	4.3	－	－
知人	665	19.5	497	18.8	168	22.0	－	－
恋人（愛人）	227	6.6	22	0.8	205	26.8	－	－
医師	27	0.8	20	0.8	7	0.9	－	－
薬局	10	0.3	7	0.3	3	0.4	－	－
その他	314	9.2	246	9.3	67	8.8	1	20.0
不明	148	4.3	117	4.4	31	4.1	－	－
覚せい剤事例全体	3,418	100.0	2,649	100.0	764	100.0	5	100.0

年齢階級別	小計		10歳～19歳		20歳～29歳		30歳～39歳		40歳～49歳		50歳～		不明	
入手経路	（人）	（%）	（人）	（%）	（人）	（%）	（人）	（%）	（人）	（%）	（人）	（%）	（人）	（%）
友人	1,680	49.2	40	42.1	362	29.2	276	21.6	102	20.9	52	18.2	8	26.7
売人	4,548	133.1	48	50.5	800	64.5	876	68.6	339	69.3	195	68.2	16	53.3
家族	82	2.4	2	2.1	16	1.3	19	1.5	3	0.6	1	0.3	－	－
知人	1,330	38.9	18	18.9	226	18.2	239	18.7	105	21.5	74	25.9	3	10.0
恋人（愛人）	454	13.3	14	14.7	127	10.2	71	5.6	13	2.7	1	0.3	1	3.3
医師	54	1.6	－	－	8	0.6	11	0.9	6	1.2	2	0.7	－	－
薬局	20	0.6	－	－	5	0.4	3	0.2	－	－	2	0.7	－	－
その他	628	18.4	10	10.5	92	7.4	133	10.4	43	8.8	34	11.9	2	6.7
不明	296	8.7	－	－	53	4.3	54	4.2	26	5.3	12	4.2	3	10.0
覚せい剤事例全体	3,418	100.0	95	100.0	1,241	100.0	1,277	100.0	489	100.0	286	100.0	30	100.0

表1－7 覚せい剤の主な乱用方法（重複回答あり）

男性・女性別	小計		男性		女性		不明	
乱用方法	（人）	（%）	（人）	（%）	（人）	（%）	（人）	（%）
経口	167	4.9	119	4.5	48	6.3	－	－
静注	2,734	80.0	2,136	80.6	593	77.6	5	100.0
筋注	59	1.7	47	1.8	12	1.6	－	－
皮下注	29	0.8	26	1.0	3	0.4	－	－
吸入	322	9.4	235	8.9	87	11.4	－	－
点鼻	14	0.4	11	0.4	3	0.4	－	－
吸煙	478	14.0	352	13.3	125	16.4	1	20.0
その他	82	2.4	61	2.3	21	2.7	－	－
不明	44	1.3	36	1.4	8	1.0	－	－
覚せい剤事例全体	3,418	100.0	2,649	100.0	764	100.0	5	100.0

年齢階級別	小計		10歳～19歳		20歳～29歳		30歳～39歳		40歳～49歳		50歳～		不明	
乱用方法	（人）	（%）	（人）	（%）	（人）	（%）	（人）	（%）	（人）	（%）	（人）	（%）	（人）	（%）
経口	167	4.9	4	4.2	68	5.5	61	4.8	17	3.5	14	4.9	3	10.0
静注	2,734	80.0	72	75.8	918	74.0	1,038	81.3	425	86.9	257	89.9	24	80.0
筋注	59	1.7	1	1.1	19	1.5	22	1.7	7	1.4	9	3.1	1	3.3
皮下注	29	0.8	－	－	4	0.3	14	1.1	7	1.4	4	1.4	－	－
吸入	322	9.4	23	24.2	189	15.2	83	6.5	17	3.5	6	2.1	4	13.3
点鼻	14	0.4	1	1.1	8	0.6	4	0.3	1	0.2	－	－	－	－
吸煙	478	14.0	17	17.9	223	18.0	177	13.9	49	10.0	10	3.5	2	6.7
その他	82	2.4	1	1.1	25	2.0	38	3.0	12	2.5	5	1.7	1	3.3
不明	44	1.3	－	－	20	1.6	15	1.2	7	1.4	2	0.7	－	－
覚せい剤事例全体	3,418	100.0	95	100.0	1,241	100.0	1,277	100.0	489	100.0	286	100.0	30	100.0

表1－8 覚せい剤の乱用開始からの期間

男性・女性別	小計		男性		女性		不明	
乱用開始からの期間	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
1年以内	315	9.2	214	8.1	100	13.1	1	20.0
3年以内	589	17.2	381	14.4	207	27.1	1	20.0
5年以内	502	14.7	360	13.6	141	18.5	1	20.0
10年以内	619	18.1	487	18.4	131	17.1	1	20.0
10年超過	1,160	33.9	1,027	38.8	132	17.3	1	20.0
不詳	206	6.0	163	6.2	43	5.6	－	－
不明	27	0.8	17	0.6	10	1.3	－	－
覚せい剤事例全体	3,418	100.0	2,649	100.0	764	100.0	5	100.0

年齢階級別	小計		10歳～19歳		20歳～29歳		30歳～39歳		40歳～49歳		50歳～		不明	
乱用開始からの期間	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
1年以内	315	9.2	47	49.5	172	13.9	65	5.1	17	3.5	11	3.8	3	10.0
3年以内	589	17.2	37	38.9	357	28.8	155	12.1	30	6.1	7	2.4	3	10.0
5年以内	502	14.7	7	7.4	303	24.4	151	11.8	25	5.1	10	3.5	6	20.0
10年以内	619	18.1	1	1.1	252	20.3	274	21.5	64	13.1	25	8.7	3	10.0
10年超過	1,160	33.9	－	－	93	7.5	534	41.8	312	63.8	210	73.4	11	36.7
不詳	206	6.0	2	2.1	55	4.4	87	6.8	37	7.6	22	7.7	3	10.0
不明	27	0.8	1	1.1	9	0.7	11	0.9	4	0.8	1	0.3	1	3.3
覚せい剤事例全体	3,418	100.0	95	100.0	1,241	100.0	1,277	100.0	489	100.0	286	100.0	30	100.0

表1－9 覚せい剤の乱用経過

年齢階級別	小計		10歳～19歳		20歳～29歳		30歳～39歳		40歳～49歳		50歳～		不明	
乱用の経過	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
連続的	612	17.9	43	45.3	289	23.3	179	14.0	62	12.7	35	12.2	4	13.3
断続的	2,674	78.2	50	52.6	908	73.2	1,056	82.7	401	82.0	235	82.2	24	80.0
不明	132	3.9	2	2.1	44	3.5	42	3.3	26	5.3	16	5.6	2	6.7
覚せい剤事例全体	3,418	100.0	95	100.0	1,241	100.0	1,277	100.0	489	100.0	286	100.0	30	100.0

表1－10 乱用は初発か・再発か

年齢階級別	小計		10歳～19歳		20歳～29歳		30歳～39歳		40歳～49歳		50歳～		不明	
初発・再発別	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
初発	1,005	29.4	64	67.4	493	39.7	304	23.8	90	18.4	50	17.5	4	13.3
再発	2,227	65.2	23	24.2	682	55.0	905	70.9	371	75.9	223	78.0	23	76.7
不明	186	5.4	8	8.4	66	5.3	68	5.3	28	5.7	13	4.5	3	10.0
覚せい剤事例全体	3,418	100.0	95	100.0	1,241	100.0	1,277	100.0	489	100.0	286	100.0	30	100.0

表1－11 覚せい剤に対する依存度

年齢階級別	小計		10歳～19歳		20歳～29歳		30歳～39歳		40歳～49歳		50歳～		不明	
依存度	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
試用段階	52	1.5	3	3.2	23	1.9	14	1.1	5	1.0	5	1.7	2	6.7
娯楽段階	247	7.2	26	27.4	120	9.7	58	4.5	32	6.5	10	3.5	1	3.3
精神的依存	2,819	82.5	61	64.2	995	80.2	1,086	85.0	408	83.4	243	85.0	26	86.7
身体的依存	438	12.8	8	8.4	157	12.7	165	12.9	71	14.5	32	11.2	5	16.7
不明	61	1.8	－	－	17	1.4	24	1.9	11	2.2	8	2.8	1	3.3
覚せい剤事例全体	3,418	100.0	95	100.0	1,241	100.0	1,277	100.0	489	100.0	286	100.0	30	100.0

表1－12 最長の中断期間

年齢階級別	小計		10歳～19歳		20歳～29歳		30歳～39歳		40歳～49歳		50歳～		不明	
最長の中断期間	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
1週間以内	139	4.1	14	14.7	70	5.6	34	2.7	12	2.5	7	2.4	2	6.7
1ヶ月以内	334	9.8	26	27.4	193	15.6	84	6.6	22	4.5	7	2.4	2	6.7
6ヶ月以内	611	17.9	20	21.1	297	23.9	213	16.7	46	9.4	32	11.2	3	10.0
1年以内	326	9.5	7	7.4	123	9.9	115	9.0	43	8.8	37	12.9	1	3.3
3年以内	601	17.6	1	1.1	152	12.2	272	21.3	111	22.7	56	19.6	9	30.0
3年超過	372	10.9	－	－	54	4.4	144	11.3	100	20.4	70	24.5	4	13.3
不詳	934	27.3	23	24.2	310	25.0	381	29.8	139	28.4	73	25.5	8	26.7
不明	101	3.0	4	4.2	42	3.4	34	2.7	16	3.3	4	1.4	1	3.3
覚せい剤事例全体	3,418	100.0	95	100.0	1,241	100.0	1,277	100.0	489	100.0	286	100.0	30	100.0

表1－13 覚せい剤乱用の頻度

男性・女性別	小計		男性		女性		不明	
乱用の頻度	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
最近1ヶ月に20回以上	346	10.1	239	9.0	106	13.9	1	20.0
最近1ヶ月に1回以上20回未満	1,564	45.8	1,218	46.0	346	45.3	－	－
最近1年間に1回以上	564	16.5	432	16.3	129	16.9	3	60.0
過去に1回以上	374	10.9	312	11.8	62	8.1	－	－
不詳	505	14.8	401	15.1	103	13.5	1	20.0
不明	65	1.9	47	1.8	18	2.4	－	－
覚せい剤事例全体	3,418	100.0	2,649	100.0	764	100.0	5	100.0

年齢階級別	小計		10歳～19歳		20歳～29歳		30歳～39歳		40歳～49歳		50歳～		不明	
乱用の頻度	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
最近1ヶ月に20回以上	346	10.1	15	15.8	157	12.7	121	9.5	35	7.2	14	4.9	4	13.3
最近1ヶ月に1回以上20回未満	1,564	45.8	51	53.7	609	49.1	598	46.8	200	40.9	94	32.9	12	40.0
最近1年間に1回以上	564	16.5	14	14.7	215	17.3	190	14.9	80	16.4	60	21.0	5	16.7
過去に1回以上	374	10.9	2	2.1	82	6.6	141	11.0	80	16.4	67	23.4	2	6.7
不詳	505	14.8	11	11.6	151	12.2	206	16.1	83	17.0	48	16.8	6	20.0
不明	65	1.9	2	2.1	27	2.2	21	1.6	11	2.2	3	1.0	1	3.3
覚せい剤事例全体	3,418	100.0	95	100.0	1,241	100.0	1,277	100.0	489	100.0	286	100.0	30	100.0

表1－14 初診時の各症状(重複回答あり)

男性・女性別	小計		男性		女性		不明	
初診時の各症状	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
急性中毒症状	878	25.7	657	24.8	220	28.8	1	20.0
離脱症状	298	8.7	247	9.3	50	6.5	1	20.0
意識・注意力異常	1,601	46.8	247	9.3	50	6.5	1	20.0
異常体験	2,547	74.5	2,020	76.3	524	68.6	3	60.0
感情面の異常	2,721	79.6	2,109	79.6	608	79.6	4	80.0
欲動面の異常	1,960	57.3	1,477	55.8	478	62.6	5	100.0
その他	368	10.8	305	11.5	62	8.1	1	20.0
覚せい剤事例全体	3,418	100.0	2,649	100.0	764	100.0	5	100.0

年齢階級別	小計		10歳～19歳		20歳～29歳		30歳～39歳		40歳～49歳		50歳～		不明	
初診時の各症状	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
急性中毒症状	878	25.7	31	32.6	326	26.3	304	23.8	131	26.8	78	27.3	8	26.7
離脱症状	298	8.7	4	4.2	112	9.0	108	8.5	50	10.2	21	7.3	3	10.0
意識・注意力の異常	1,601	46.8	48	50.5	583	47.0	576	45.1	238	48.7	148	51.7	8	26.7
異常体験	2,547	74.5	63	66.3	885	71.3	977	76.5	386	78.9	214	74.8	22	73.3
感情面の異常	2,721	79.6	74	77.9	1,004	80.9	1,017	79.6	392	80.2	213	74.5	21	70.0
欲動面の異常	1,960	57.3	59	62.1	778	62.7	694	54.3	261	53.4	154	53.8	14	46.7
その他	368	10.8	10	10.5	109	8.8	136	10.6	70	14.3	40	14.0	3	10.0
覚せい剤事例全体	3,418	100.0	95	100.0	1,241	100.0	1,277	100.0	489	100.0	286	100.0	30	100.0

表1－15 主な学歴別

年齢階級別	小計		10歳～19歳		20歳～29歳		30歳～39歳		40歳～49歳		50歳～		不明	
主な学歴別	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
小学校全体	4	0.1	-	-	0	-	-	-	-	-	4	1.4	-	-
中学校在学	34	1.0	4	4.2	11	0.9	12	0.9	2	0.4	4	1.4	1	3
中学校卒業	936	27.4	30	31.6	275	22.2	340	26.6	160	32.7	121	42.3	10	33.3
中学校全体	999	29.2	35	36.8	291	23.5	362	28.4	166	34.0	134	46.9	11	36.7
中卒後各種学校全体	97	2.8	-	-	48	3.9	36	2.8	10	2.0	2	0.7	1	3.3
高校在学	34	1.0	14	14.7	14	1.1	5	0.4	1	0.2	-	-	-	-
高校中退	1,040	30.4	35	36.8	417	33.6	394	30.9	144	29.4	43	15.0	7	23.3
高校卒業	596	17.4	5	5.3	236	19.0	214	16.8	80	16.4	55	19.2	6	20.0
高校全体	1,682	49.2	54	56.3	668	53.8	619	48.5	228	46.6	100	35.0	13	43.3
高卒後各種学校全体	177	5.2	2	2.1	98	7.9	62	4.9	12	2.5	3	1.0	-	-
短大全体	51	1.5	1	1.1	29	2.3	16	1.3	3	0.6	1	0.3	1	3.3
大学全体	167	4.9	1	1.1	49	3.9	82	6.4	29	5.9	6	2.1	-	-
覚せい剤事例全体	3,418	100.0	95	100.0	1,241	100.0	1,277	100.0	489	100.0	286	100.0	30	100.0

(註)小学校全体などの全体とは、在学・中退・卒業・不明を合計したものを表す。